

新発田城跡 発掘調査報告書Ⅻ

第4・5・6地点

2021

新発田市教育委員会

新発田城跡 発掘調査報告書Ⅻ

第4・5・6地点

2021

新発田市教育委員会

例 言

- 1 本報告書は、新潟県新発田市大手町6丁目2番(第4地点)及び大手町6丁目6番56(第5・6地点)に所在する新発田城跡(しばたじょうあと)の本発掘調査記録である。
- 2 本発掘調査は、陸上自衛隊新発田駐屯地施設増設(第4地点)及び新発田城址公園整備事業(第5・6地点)に先立つもので、東京防衛施設局長(第4地点:現地調査当時、現在は北関東防衛局に移管)及び新発田市長(第5・6地点)の委託を受けた新発田市教育委員会が調査主体となり、現地調査を昭和62年8月3日から8月7日(第4地点)、平成4年4月20日から4月23日(第5地点)、平成4年5月18日から5月21日(第6地点)にかけて実施した。
- 3 本発掘調査の経費は、第4地点については東京防衛施設局と新発田市が結んだ委託契約に基づき、現地調査及び基礎整理作業の100%を事業者である東京防衛施設局が負担した。また、第5・6地点の現地調査及び本書の作成費用については、全額を新発田市が負担した。
- 4 本書には、第6地点に隣接する位置で新発田市教育委員会が平成21年2月2日と2月3日に実施した、新発田城址公園表門内 排水対策工事の立会い結果を併せて掲載している。
- 5 遺物・記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。遺物の注記は「SJ」とし、地点名を「Ⅳ」「Ⅴ」「Ⅵ」とローマ数字で付記した。また、必要に応じグリッド・日付などを記した。
- 6 本書の編集は石垣義則(新発田市教育委員会)が行った。執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章Ⅰ、第Ⅳ章Ⅰ、第Ⅴ章Ⅰ・Ⅳを鈴木晩(新発田市教育委員会)、第Ⅲ章Ⅱ(瓦)を酒井瑞季(新発田市教育委員会)が担当し、残りを石垣が行った。また、本報告書掲載写真は、遺構を田中耕作・鶴巻康志(ともに現地調査当時新発田市教育委員会)が、遺物を石垣・酒井が撮影した。
- 7 出土遺物の図化作業・拓本・トレース及び挿図・図版の作成は、石垣・鈴木・酒井の指示のもと作業員が行った。
- 8 本書に掲載の地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図「新発田」及び市作成の地形図であり、必要に応じて縮小している。方位記号は真北を示す。
- 9 土層説明の土色及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」(1995年版)を用いた。
- 10 図書館等(著作権法第31条第1項に規定する図書館等をいう)の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 11 発掘調査から本書の作成にあたり、下記の個人・機関から御協力・御支援を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(順不同 敬称略)

新潟県教育庁文化行政課 東京防衛施設局(現地調査当時) 陸上自衛隊新発田駐屯地

本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地	1
2 周辺の遺跡と歴史的環境	3

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯と調査体制	4
2 本発掘調査の経過	5

第Ⅲ章 第4地点の調査

1 調査区の設定と遺構確認	6
2 遺 物	7

第Ⅳ章 第5地点の調査

1 調査区の設定と遺構確認	12
2 遺 物	13

第Ⅴ章 第6地点の調査

1 調査区の設定と基本土層	14
2 遺 構	14
3 遺 物	16
4 隣接地 工事立会いの成果	17

第Ⅵ章 ま と め

引用・参考文献	19
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図	新発田城跡の位置	1	第8図	第5・6地点の位置	12
第2図	新発田城の範囲とこれまでの発掘調査 地点	2	第9図	第5地点の平面図と基本土層	13
第3図	第4地点の調査範囲と基本土層	6	第10図	第5地点出土の土器	13
第4図	第4地点出土の陶磁器	8	第11図	第6地点の平面図	14
第5図	第4地点出土の瓦(1)	9	第12図	第6地点の基本土層と遺構断面図	15
第6図	第4地点出土の瓦(2)	10	第13図	第6地点出土の土器・陶磁器	16
第7図	第4地点出土の瓦(3)	11	第14図	表門内排水対策工事の立会い調査範囲と 土層模式図	17

表 目 次

表1	遺物観察表	20
----	-------	----

図 版 目 次

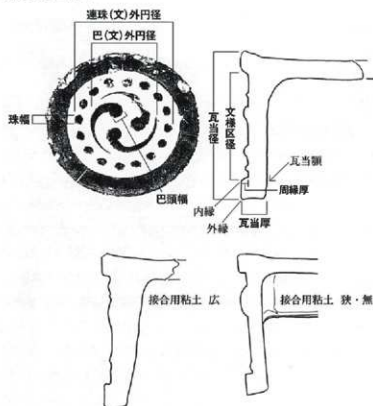
図版1	第4地点：作業風景、基本土層、 石垣背面盛土	図版3	第6地点：調査区全景、基本土層、P1～3、 1～3号溝、作業風景
図版2	第5地点：調査区全景、基本土層、遺構、 作業風景	図版4	第4地点：陶磁器、瓦(1)
		図版5	第4地点：瓦(2)
		図版6	第5・6地点：土器・陶磁器

凡 例

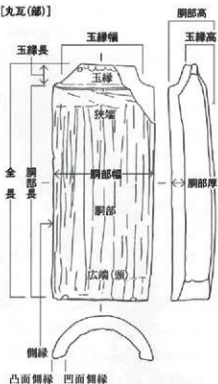
1 瓦の部位名称及び計測位置は、下図に示すとおりとする

瓦の部位名称（観察表記載 計測位置）

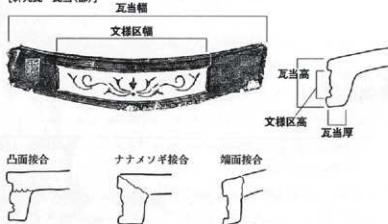
【軒丸瓦 瓦当（部）】



【丸瓦（部）】

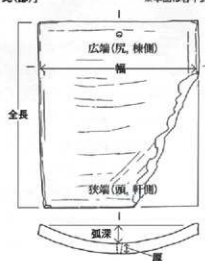


【軒丸瓦 瓦当（部）】



【平瓦（部）】

※本品は各平瓦



（新発田市教育委員会 2016 を一部改変）

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地

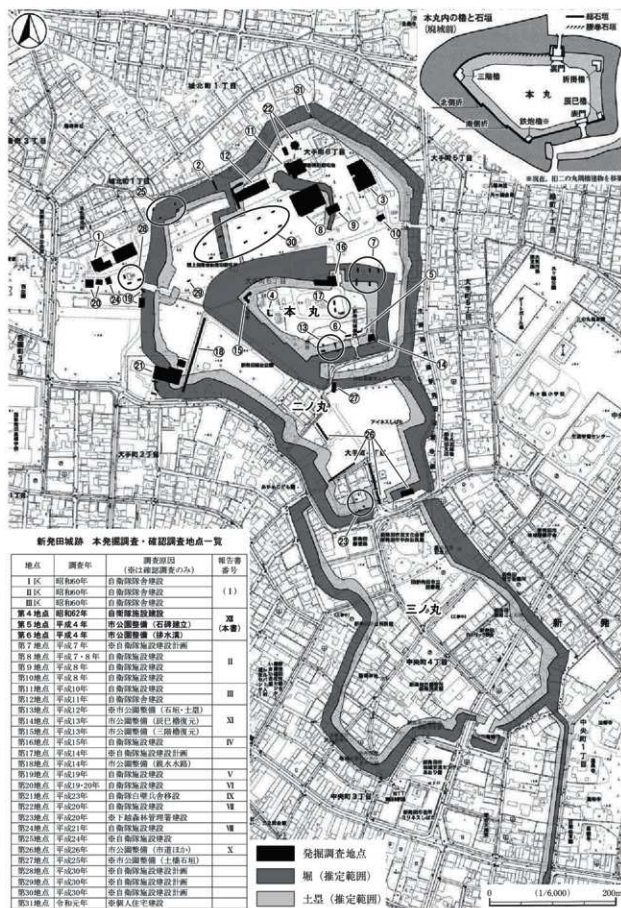
調査地の位置と立地 新潟県新発田市は新潟市の東方約25kmに位置し、面積が約533km²、人口は約9万6千人の地方都市である。市街地は、新発田藩の城下町を中心に形成されており、その周囲には新発田川や太田川といった河川を利用した水田が広がる。市域は、新潟平野の一部をなす平野部と、東縁の五頭山・棚形山脈・飯豊山地により構成される。平野部は、東側の山地から流下する加治川水系の河川作用による台地・低地と、海岸線に平行な砂丘列のある海岸平野、及び潟湖の開拓地などにより形成される(国土地理院1993)。

本遺跡は加治川によって形成された扇状地の扇央部に位置する。南西に新発田川、北東には中田川などの小河川が流れ、扇状地の中でも小高い場所に立地している。この微高地は、城と同じく南東から北西へ延びており、新発田城は地形を活かして築城されたといえる。また、扇状地の外側には新潟砂丘が何列も連なり、近世以前には河川は海に直接注がずに砂丘列沿いを西流し、砂丘列の内側には広大な潟や湿地帯が形成されていた。新発田城は、北側に人の行き来が容易ではない河川や潟・湿地帯を天然の防御施設として取り込んで築城された、と読み解くことができる(高橋1979、小村1980b)。

今回報告する第4・5・6の各地点はいずれも新発田城跡の本丸内にあたる。本丸は、南側の表門を正面、北側の裏門を裏とした不整五角形の平面形で、江戸時代を通じて藩主の御殿が置かれていた。本丸の南側と西側は総石垣が巡り、北側は腰巻石垣が築かれた。北西隅には天守に相当する三階櫓が、表門の東西両側には鉄炮櫓と辰巳櫓の二層櫓、北東側には単層の折掛櫓が築かれていた。このうち第4地点は三階櫓の内側裾部に、第5地点と第6地点は表門の内側、御殿玄関に面した広場の位置にあたる。



第1図 新発田城跡の位置



第2図 新発田城の範囲とこれまでの発掘調査地点

2 周辺の遺跡と歴史的環境

新発田城は新発田藩の初代藩主・溝口秀勝の入封に伴い、慶長7(1602)年に築城が開始され、承応3(1654)年、三代藩主・宣直のときに完成したと伝えられる。明治4(1871)年に新発田藩が廃止となるまで、藩の政治的・軍事的な中心地であり続けた。新発田市教育委員会では、陸上自衛隊新発田駐屯地内や新発田城址公園の整備、三階櫓・辰巳櫓の復元などに関連して、新発田城跡で21箇所以上の本発掘調査を実施している。

新発田城築城以前の様子 これまでの発掘調査の結果、平安時代前期の集落が存在したと判明している。検出された掘立柱建物や溝、井戸などから、土師器・須恵器・灰軸陶器などが出土している。

中世には、有力国人である新発田氏の本拠地であったと推定されている。新発田氏は、加地荘の地頭である有力御家人の佐々木氏の分流の一つで、室町時代頃には同族で本家筋の加地氏が市域の北東部、同族の竹俣氏が市域の東部、そして新発田氏が新発田城の場所を含む市域の西部を支配するようになったと言えられている。戦国時代末期の新発田氏当主である重家は、有力な武将として上杉家の下で活躍したが、謙信の跡目争いに勝利した上杉景勝と後に対立し、7年におよぶ抗争の末、天正15(1586)年に新発田氏は滅亡した(小村1980a)。

この新発田氏の本拠地と伝えられるのが、現在の新発田城跡の北側部分である。この範囲は、江戸時代の古文書や絵図に「古丸」などと記され、絵図には四角に囲まれた堀が描かれており、この場所が新発田氏の館跡だと伝えられてきた(小村1980b)。実際にこの箇所を発掘調査した結果、中世後期の堀と多くの柱穴や井戸を検出したことから、堀に囲まれた館の存在が推察される。併せて、室町時代初期から戦国時代の所産と考えられる土器・陶磁器が多く出土した。茶道具や中国産磁器、土師質土器皿などが、質・量ともに豊富で、伝承どおり新発田氏の館跡と考えられる。土器・陶磁器の年代からみて、館は鎌倉時代初期から戦国時代の終わり頃まで継続したと考えられ、特に鎌倉時代末から室町時代前半の遺構・遺物が充実し、新発田氏の勢力拡大の様子がうかがえる(新発田市教育委員会1997)。

また、この時代になると新発田氏の名が文書類に登場するようになり(阿部1980)、有力国人としての基盤が確立していった時期といえるだろう。

新発田城の築城と変遷 新発田城の変遷については「新発田城跡発掘調査報告書Ⅺ」(新発田市教育委員会2016)などで詳述しており、ここでは概略を記す。

慶長3(1598)年、豊臣秀吉の命で上杉景勝が会津へ移り、越後には堀秀治が入る。この有力大名として溝口秀勝が、加賀・大聖寺から越後・蒲原郡へ6万石で入封した。新発田重家の館があった新発田を拠点に定め、領内整備と築城に着手し、承応3(1654)年、三代藩主・宣直の時に完成した(小村1980c)。

しかし、完成からわずか14年後の寛文8(1668)年に発生した火災で城内のほとんどの建物を焼失し、その後の大地震も影響し壊滅的な被害を受けた。藩では再建に取り組み、復興したのは元禄13(1700)年のことであった(小村1980c)。その後も火災や大雨、地震などの度重なる被害を受け、その都度再建・補修が行われた。

明治維新後の廃藩置県を経て新発田城は廃城となり、城内の屋敷や櫓、門など多くの建物が解体された。江戸時代の建物として現存するのは、本丸表門と旧二の丸隅櫓(昭和35年に本丸の鉄炮櫓の位置に移築)の2棟で、いずれも国の重要文化財(建造物)に指定されている。また、平成16年には本丸の三階櫓と辰巳櫓が伝統的な木造建築で復元され、新たな市のシンボルとして親しまれている。

明治時代になると新発田城は陸軍省の所管となり、歩兵第3連隊第2大隊(後の歩兵第16連隊)の営所のほか、病院の敷地などになった。これに伴い、兵舎等の建物が建設され、新たな土地利用がなされることになった。

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯と調査体制

第4地点と第5地点・第6地点では事業者や調査年度が異なるため、個別に経緯を記述する。

第4地点 昭和62年2月に陸上自衛隊新発田駐屯地(以下、駐屯地)が新発田市教育委員会(以下、市教委)に対し、駐屯地内で施設を増設する計画を伝えた。工事は同年内の施工を予定しているとのことだったが、同所は新発田城跡の本丸に位置することから市教委では事前の発掘調査が必要であると回答した。両者は協議を重ね、同年7月から8月に現地調査を行うことで合意した。また、駐屯地側の申し出で発掘の掘削作業の一部は自衛隊員があたること、消耗品や写真の印刷現像については事業者側が直接対応することとなった。以上を受け、昭和62年7月15日付け施東第5598号(TCP)で東京防衛施設局長(当時)からの発掘調査の委託依頼により、同年7月20日に新発田市長との間で発掘調査委託契約を締結した。また、駐屯地業務隊は文化財保護法第57条の3第1項の「埋蔵文化財発掘の通知」を同年4月21日付け新発田駐屯地第388号で文化庁長官へ通知し、市教委は4月27日付け教社第40号で新潟県教育委員会教育長へ進達した。市教委では文化庁長官に同法第98条の2第1項による発掘調査の着手を7月6日付け教社第144号で通知し、8月3日より現地作業に入った。また、これに関して8月12日に遺物発見届及び埋蔵文化財保管証を提出している。現地調査終了後に遺物の水洗・注記・分類などの基礎整理作業は行ったが、別事業の緊急を要する調査が発生するなどしたため、本遺跡の本格整理作業と報告書作成は当面、実施し得なくなった。このため、これらの作業は一旦中止し、この費用を減額して清算するものとして、昭和63年2月9日付け教社第307号で東京防衛施設局長に対して実績報告を行った。

第5地点 平成4年3月に、表門内側の公園敷地に石川県加賀市との友好都市締結記念の石碑を建立する計画が明らかとなった。周知の埋蔵文化財包蔵地である同所は、工事の事前にも本発掘調査が必要であることから、事業担当である新発田市国際交流室(当時)と協議した結果、同年4月に本発掘調査を行うことで合意した。これにより、新発田市長は文化財保護法第57条の3第1項の「埋蔵文化財発掘の通知」を同年4月3日付け教生第2号で文化庁長官へ通知し、市教委は同日付け教生第5号で新潟県教育委員会教育長へ進達した。市教委では文化庁長官に同法第98条の2第1項による発掘調査の着手を4月4日付け教生第6号で通知し、4月20日より現地作業に入った。また、これに関して4月27日に遺物発見届及び埋蔵文化財保管証を提出した。現地調査終了後に遺物の水洗・注記・分類などの基礎整理作業を実施した。

第6地点 本丸表門内側の石碑建立(第5地点)に伴い、その周辺の排水対策として、急造集水桝の設置工事とこれに先立つ本発掘調査の必要が生じ、新発田市長は文化財保護法第57条の3第1項の「埋蔵文化財発掘の通知」を同年4月14日付け教生第20号で文化庁長官へ通知した。また、市教委では文化庁長官に同法第98条の2第1項による発掘調査の着手を4月14日付け教生第19号で通知し、第5地点の石碑建立後の5月8日より現地作業に入った。これに関して5月26日に遺物発見届及び埋蔵文化財保管証を提出している。現地調査終了後に遺物の水洗・注記・分類などの基礎整理作業を実施した。

隣接での工事立会い 第6地点に隣接する位置で、新発田城址公園の整備に伴う表門内排水対策工事を行い、掘削幅1m以内と小規模な掘削のため、立会い調査を実施した。

(立会い期間:平成21年2月2日～2月3日 面積:約27㎡)

調査体制

昭和62年度(本発掘調査:第4地点)

調査主体 新発田市教育委員会(教育長 渡辺 秀晃)
 監理 細野 一二(社会教育課長)
 総括 宮崎 勝英(社会教育課 課長補佐)

調査担当者 田中 耕作(社会教育課 学芸員)
 庶務 高橋 龍夫(社会教育課 係長)

平成4年度(本発掘調査:第5・6地点)

調査主体 新発田市教育委員会(教育長 渡辺 秀晃)
 監理 加藤 亮(生涯教育課長)
 総括 山口 栄治(生涯教育課 参事)
 五十嵐憲男(生涯教育課 課長補佐)

調査担当者 田中 耕作(生涯教育課 学芸員)
 調査員 鶴巻 康志(生涯教育課 学芸員)
 庶務 久志田正弘(生涯教育課 係長)

令和2年度(整理作業)

調査主体 新発田市教育委員会(教育長 工藤 ひとし)
 監理 平山 真(文化行政課長)
 総括 小林 大作(文化行政課 課長補佐)

調査担当者 石垣 義則(文化行政課 文化財技師)
 調査員 鈴木 暁(文化行政課 主任)
 調査員 酒井 瑞季(文化行政課 文化財技師)
 庶務 渡邊美穂子(文化行政課 埋蔵文化財係長)

令和3年度(印刷・刊行)

調査主体 新発田市教育委員会(教育長 工藤 ひとし)
 監理 平山 真(文化行政課長)
 総括 杉山 隆(文化行政課 課長補佐)

調査担当者 石垣 義則(文化行政課 文化財技師)
 庶務 渡邊美穂子(文化行政課 埋蔵文化財係長)

2 本発掘調査の経過

第4地点 昭和62(1987)年8月3日～8月7日 現地調査に着手する。既存の施設を中心に、幅3mの調査区をL字状に設定する。人力で掘削を行い、調査区には近世の遺物とともに近代以降のガラスや陶磁器を含む層が厚く存在し、攪乱が深くまで達していることが判明する。北半ではサブトレンチを掘削した。地表下80cmまでは攪乱が続き、その下には炭化物を多く含む層があり、地山に達した。調査区壁面の土層を観察した結果、調査域全体が攪乱されているとの判断に至った。並行して調査区及び周辺の平面図を平板測量で作図し、断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。以上で調査を終え、機材を撤収して現地調査を終了した。

第5地点 平成4(1992)年4月20日～4月23日 機材を搬入し、現地調査に着手する。トレンチ状の調査区を設定し、人力で掘削を行う。表土を取り除いた深さ25cmで遺構確認を行うも、空き缶やビニール、コンクリート片を含む攪乱が大半を占めた。さらに30cmほど掘り下げると、硬くしまった面に達する。調査区の西側は攪乱が著しいため、東端の4区のみを深掘りする。その結果、深さ150cmの地点で砂層の地山となる。この面で土坑状の落ち込みを検出した。並行して調査区及び周辺の平面図を平板測量で作図し、断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。以上で調査を終え、機材を撤収して現地調査を終了した。

第6地点 平成4(1992)年5月18日～5月21日 機材を搬入し、現地調査に着手する。トレンチ状の調査区を設定し、人力で掘削を始める。深さ20cmで上水道管が見つかったため、調査区の東側から1.5～3mの範囲は掘り下げを断念した。暗灰色土上面で遺構確認を行い、ピットを検出した。さらに10cmほど掘り下げると青灰色シルトの地山に達した。この地山上面で遺構を検出し、溝から中世の遺物が出土した。調査区及び周辺地形を平板測量で作図し、断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。以上で現地調査を終えた。

整理作業 現地調査終了後に、遺物の水洗や注記などを実施した。本格的な整理作業及び報告書作成は令和2(2020)年度に実施した。遺物は実測・撮影・観察表作成などを、現場記録類は整合確認、図面の合成を実施した。各図面をトレースして図版版下を作成し、令和3年度に原稿執筆を完了し、報告書を印刷・刊行した。

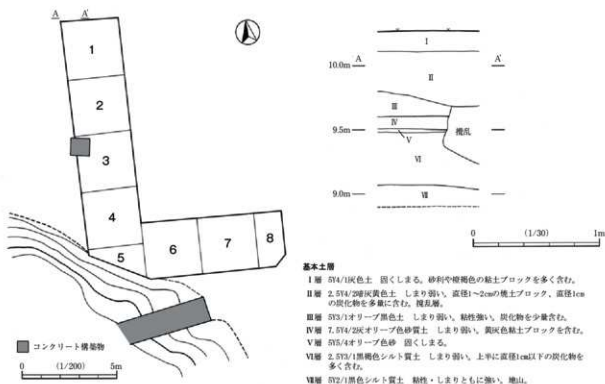
第Ⅲ章 第4地点の調査

1 調査区の設定と遺構確認

調査区の設定 (第3図左) 第4地点は本丸の南西辺に位置する石垣背面盛土の裾部にあたる。今回は新設する施設の基礎部分について発掘調査を実施した。調査区は、石垣背面盛土に接する箇所直角に折れる幅3mのL字状に設定した。北側から3mごとに区切り、1～8グリッドと呼称した。

基本土層 (第3図右) 調査区北端部、1グリッドの北壁で土層観察を行った。表土(Ⅰ層)は碎石や粘土のブロックを多く含む現代の整地層である。Ⅱ層は焼土ブロックや炭化物を部分的に多く含む。近世の瓦とともに近代以降の陶磁器片やガラスを多く含む、攪乱層と判断できる。Ⅲ～Ⅵ層は色調や土質、混入物の差異から分層した。いずれの層も無遺物層で時期は不明である。Ⅲ層上面から掘り込まれる落ち込みがあり、瓦を多く含む。他の遺物は出土しないが、大量の瓦を含むことから、城郭建物廃絶時の明治初期の攪乱と考えた。また、Ⅴ層はしりの強い砂層である。Ⅶ層は黒味がかるシルト質土で、しりが強く、地山とした。

遺構確認 攪乱土のⅡ層まで全体を掘り下げ、その下のⅢ層及びⅣ層上面・Ⅴ層上面をそれぞれ遺構確認と推定して精査を行ったが遺構は一切検出されなかった。5グリッドでは、Ⅲ層上面で遺構らしき平面プランを検出したが、プランが不整形であり、その性格が判然としないことから、サブトレシをを設定し掘削した。その結果、同プランは土坑などの掘り込みではなく、石垣背面盛土の斜面堆積を平面的に検出したものと判明した。このサブトレシの土層を観察すると、黒褐色土とシルトブロックを多く含む土が同じ傾斜を持つ斜面堆積であることが分かった(図版1)。その傾斜角度は、現況の石垣背面盛土の傾斜に近似しており、その検出位置からみても、同盛土の裾部にあたると考えられる。但し、遺物などの出土は無く、明確な時期を決定する根拠を欠く。



第3図 第4地点の調査範囲と基本土層

1～4グリッドでは、上述のⅢ層上面からの擾乱が大きく広がり、遺構を検出できなかった。また、東側の6～8グリッドでは、戦前の旧陸軍施設や現在の自衛隊施設建設による擾乱が顕著で、こちらでも遺構は確認できなかった。

2 遺物

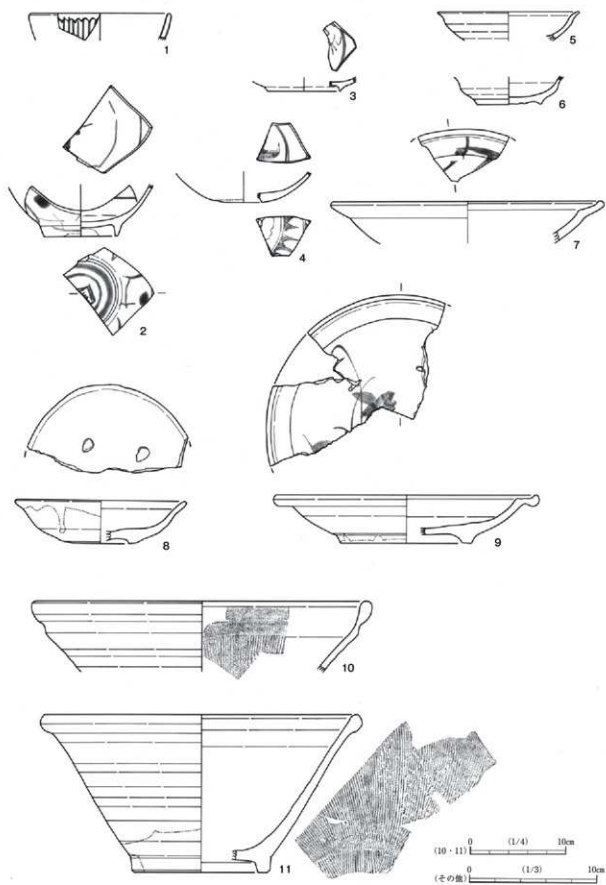
出土遺物には中世から近世の陶磁器・瓦があり、その量は、陶磁器が浅箱1箱分(浅箱の内寸:54cm×34cm×10cm)、瓦が浅箱8箱分である。なお、瓦のほとんどが焼けて表面を黒く仕上げた黒瓦だが、一部、施釉による赤瓦もある。遺物の多くは擾乱からの出土である。本稿では、遺物の時期や形状が分かるものを中心に抽出し、図化した。

陶磁器(第4図、図版4) 1は青磁の線描蓮弁文碗である。口径が11.0cmと、一般的な碗より小さく、小碗の部類に入る。上田分類(上田1982)のB・IV類にあたり、時期は15世紀後半から16世紀前半とみられる。2は青花の碗である。文様は花卉文が描かれ、見込みには円形を表現した線刻が施される。また、高台内には二重圈線が引かれ、その内側には二重方形枠内に変形字を入れた銘が染付けされる。軸画は青味がかった透明釉である。高台登付には釉薬は施されず、軸着を防ぐための砂が付着する。時期は16世紀末から17世紀前半とみられる。3・4は青花の皿である。3は小野分類(小野1982)のⅢB2群と考えられ、内面には文様が描かれるが、そのモチーフは不明である。高台登付には、軸着を防ぐための細砂が付着する。時期は16世紀後半と考えられる。4は小野分類のⅢC群にあたり、底部は萐荷底を呈し、高台登付の釉薬は削り取られている。見込みには花鳥、外面には芭蕉葉文が描かれている。時期は15世紀後半から16世紀中葉とみられる。

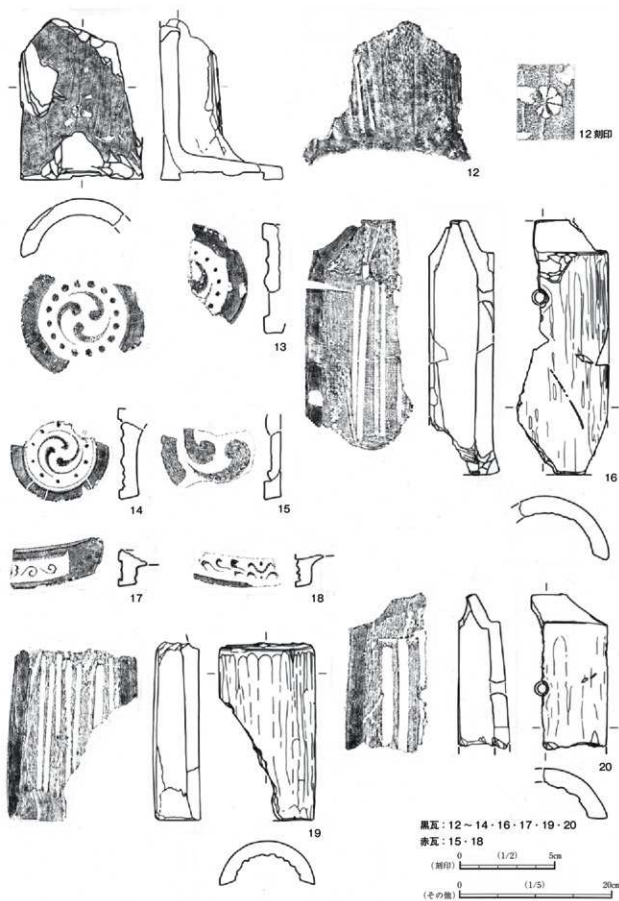
5・6は瀬戸美濃の端反皿で、全面に明るい緑色の灰釉が施される。6の付け高台内には輪下ナ痕が残る。いずれも大濠第1段階(1480～1530年頃)に比定できる(愛知県史編さん委員会2007)。

7は肥前陶器の皿である。口径が21.0cmで、口縁部が折縁を呈する。内面には鉄絵で文様が描かれるが、そのモチーフは不明である。時期は17世紀前半と考えられる。8も肥前陶器の皿である。口縁部は反り、高台はわずかに削り出される。釉薬は白濁した薬灰釉で、高台部分には掛けられない。見込みには胎土目積みの痕跡が認められ、時期は大橋1期(1580～1600年代)に比定できる(大橋1989)。9～11は産地不明の陶器である。9は皿で、化粧土が施された後に鉄絵で草文が描かれる。見込みには焼台(桔梗台)の痕が認められる。時期は19世紀後半以降と考えられる。10・11は玉縁状口縁を有する描鉢である。10の内外面には鉄釉が厚く掛けられている。11にも鉄釉が掛けられているが、高台は無釉である。見込みには焼台を介さず、直接重ね焼きした痕跡が認められる。いずれも時期は19世紀後半以降と考えられる。

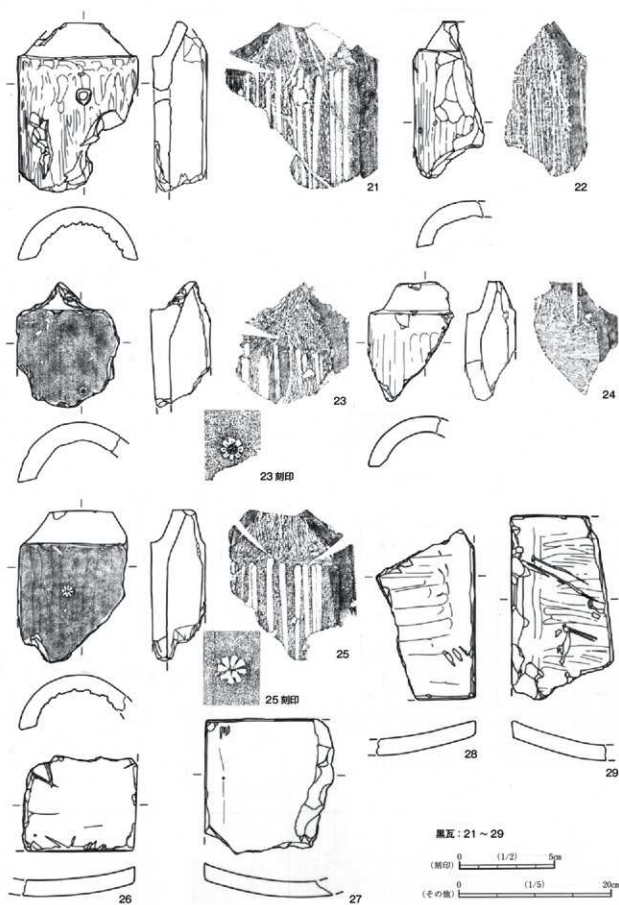
瓦(第5～7図、図版4・5) 12～16は軒丸瓦で、15が赤瓦、その他が黒瓦である。12・13は、いずれも連珠三巴文で珠数が16である。この瓦当文様は、三巴文外円径/連珠文外円径の比率と、連珠文珠幅と巴頭幅の大小により2種4細分(a種①・②、b種①・②)されている(渡邊2016)。12は三巴文外円径/連珠文外円径の比率が69%で、珠幅は巴頭幅より小さく、その差が0.6cmであることから、b種①に分類される。瓦当部と丸部の接合には、瓦当裏面全体に接合用の粘土を広く貼りつける方法が用いられている。また、丸部凸面は、ケズリ後に縦方向のミガキ調整を行い、釘穴と「八弁花」の刻印がある。丸部凹面は、布目(刺織)の瓦眼・タタキがみられる。13は瓦当片で、珠幅が巴頭幅より小さく、その差は1.2cmと極端であることから、b種②と考えられる。丸瓦との接合部には、カキヤブリ痕(櫛歯状工具による平行沈線)がみられる。14は、連珠三巴文で珠数が10である。15は三巴文で巴は右巻きである。16は軒丸瓦の瓦当が欠損したものである。瓦当との接合部には、カキヤブリ痕がみられる。また、丸部凸面は、ケズリ後に縦方向のミガキ調整を行っており、釘穴がある。丸部凹面は、コ



第4図 第4地点出土の陶磁器



第5図 第4地点出土の瓦(1)



第6図 第4地点出土の瓦(2)

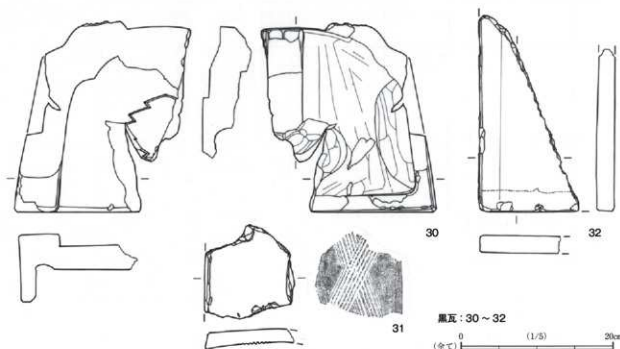
ビキB (森田1984)・布目(刺縫い圧痕)・タタキがみられる。

17・18は軒平瓦で、それぞれ黒瓦・赤瓦である。17は8の字状文である。子葉を欠くことから、b種の可能性がある。瓦当部と平部にはナナメソギ接合が用いられ、接合部にはカキヤブリ痕がみられる。18は菊文である。瓦当部と平部には凸面接合が用いられ、接合部にはカキヤブリ痕がみられる。

19～25は丸瓦で、ほとんどが黒瓦である。25のみ、灰白色の無釉の瓦である。凸面の刻印「八弁花」は、これまで新発田城跡から出土した瓦では、黒瓦のみに押されていることから(新発田市教育委員会2008・2015・2016)、25も黒瓦の可能性が高い。19～25は、凸面にはいずれもケズリ後に縦方向のミガキ調整を行っている。凹面にはほとんどに布目(刺縫い圧痕)・タタキがあるが、24のみ刺縫い圧痕のない布目でタタキもみられなかった。また、20・21には釘穴・吊り紐痕、22・24にはコビキB、23には「芯持ち八弁花」の刻印がみられる。なお、玉縁側縁から胴部側縁上端にかけての調整方法に、「玉縁側縁と胴部側縁上端を面取りするもの」と「玉縁側縁のみを面取りするもの」の2種類が確認された。今回の掲載資料では、16・21・22・24・25が前者、20が後者にあたる。

26～29は平瓦で、全て黒瓦である。凸面は、ほとんどにナデ調整がみられるが、29のみ無調整である。凹面は、いずれもミガキ調整を行っている。

30～32は特殊瓦で、いずれも黒瓦である。30は新発田藩主溝口氏の家紋である五階菱を付した鬼瓦である。31は鯰斗瓦である。凸面は無調整で、凹面にはミガキ調整と平行沈線が施されている。32は海鼠瓦である。凸面・凹面ともにミガキ調整が行われている。表面側縁から24cm内側に側縁と並行した刻線があり、漆喰を乗せる際の目安と考えられている(金子1999)。また、側面には釘で固定したとみられる痕跡がある。



第7図 第4地点出土の瓦(3)

第Ⅳ章 第5地点の調査

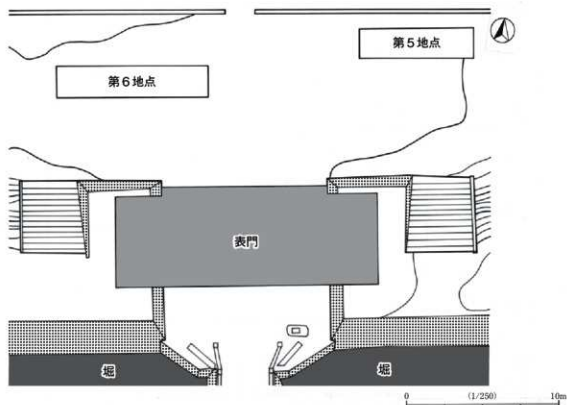
1 調査区の設定と遺構確認

調査区の設定(第8図) 第5地点は、本丸の南側に位置する表門の内側にあたる。新設する石碑の基礎部分について発掘調査を実施した。調査区は幅1.9m、長さ7.5mで、2mごとに区切ったグリッドを設定し、西側から1～4グリッドとした。

基本土層(第9図下) 1～3グリッドは、近代以降の攪乱が著しく、現地表面から深さ80cmまで、近世以前の土層は残っていなかった。同所は、旧陸軍時代に弾薬庫が置かれ、その防壁壁が設けられていた場所にあたる(井上1994)。これらの攪乱は、この造成・撤去に関連したものと考えられる。このため、攪乱の影響が小さい調査区東端部の4グリッド東壁面で土層の堆積を観察した。ただし、地表下80cmでは地山に達しなかったため、サブトレンチを掘削して土層確認を行った。

I層は現表土で、砕石のほかに現代の瓶・缶などを含む。II層は近代以降の造成土で、コンクリート片に混じって近世瓦を含む。III層は褐灰色土で、上層に比べしみが弱い。旧陸軍時代の整地層の可能性がある。IV層は地山ブロックを多く含む層で、南側へ落ち込む遺構の埋土と考えられる。V層はIV層の底部に沿って斜面堆積した層で、炭化物を多く含む。IV層と同じ遺構の埋土といえる。VI層は、IV層及びV層の下で掘り込まれた層で、遺構の埋土と考えられる。IV層～VI層から遺物は出土しなかった。VII層は淡黄色砂の地山である。

遺構確認(第9図上) 上述のとおり、1～3グリッドでは調査深度までで遺構は確認できなかった。一方、



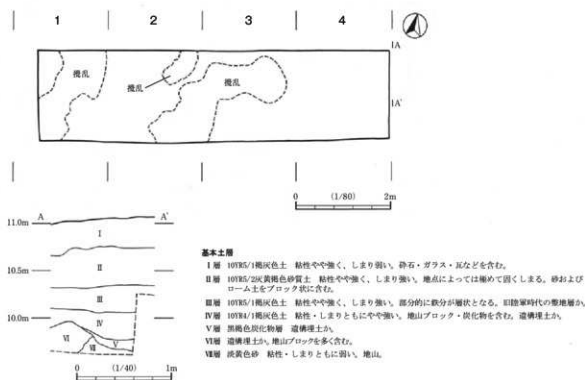
第8図 第5・6地点の位置

4 グリッドにおいては、遺構と思われる土層を確認している。ただし、この土層は調査掘削深度以下に設定したサブトレレンチでの検出のため、この遺構の平面形状や性格は不明である。

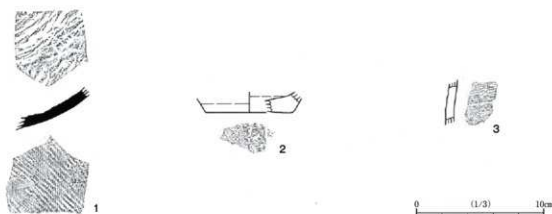
2 遺 物

出土遺物には古代から近世の土器・陶磁器があり、その量は浅箱0.2箱分である。但し、出土層位は明らかではない。土器・陶磁器は、細片が非常に多く、図化できるものは限られていた。

1 は在地産産の須恵器横瓶である。外面にはカキメが施される。2 は土師器小甕である。ロクロ成形で、底部外面には回転糸切り痕が残る。二次焼成により、器面に赤化が認められる。3 は土師器長甕である。ロクロ成形で、内面はロクロナデのみで、外面にはカキメが施される。内面にはコゲとみられる炭化物が付着している。



第9図 第5地点の平面図と基本土層



第10図 第5地点出土の土器

第V章 第6地点の調査

1 調査区の設定と基本土層

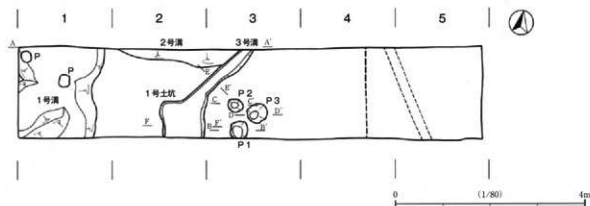
調査区の設定 第6地点は、本丸の南側に位置する表門の内側にあたる(第8図)。排水用の暗渠橋設置に伴い発掘調査を実施した。調査区は幅1.9m、長さ10mで、2mごとに区切ったグリッドを設定し、西側から1～5グリッドに分けた(第11図)。なお、4～5グリッドにかけて、IV層中に水道管が埋設されていたため、管の部分は掘削を停止した。

基本土層(第12図上) 調査区の北側壁で土層を観察した。本調査区は第5地点に比べて、攪乱の度合いは低い。I層は表土で、碎石を多く含む現代の整地層である。II層は炭化物を少量含む砂質土で、中世から近世の遺物が出土している。III層からⅤ層までは、砂質土と粘質土が厚さ5～10cm程度で互層状に重なる。Ⅲ層とⅣ層は極めて固くしめる。これらの状況からⅢ層からⅤ層までは時期不詳ながら整地層と考えたい。なお、V層上面から土師質土器の皿が出土した。IX層は黒色粘質土で、調査区の西側部分で面的に広がるが、層厚は薄い。多量の炭化物と少量の焼土ブロックを含む。X層は黄灰色砂質土で、上面においてピット3基を検出した。XII層は炭化物を多く含む黒褐色粘質土で、部分的に薄く堆積する。続くXIII層からは中世の遺物が出土している。XIV層は自然堆積のぶい黄色シルトで、地山である。調査では、X層上面とXIV層上面を遺構確認面として精査し、以下の遺構を検出した。

2 遺 構

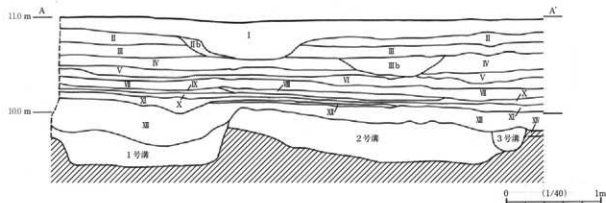
第1面の遺構(第12図下) X層上面を遺構確認の第1面として精査した結果、3グリッドでピット3基(P1～3)を検出した。3基は1×1mの範囲内に密集し、いずれも直径が30cm強、深さが50cm強である。埋土はいずれも地山ブロックを主体とし、土層中央部でやや粘性が弱い傾向がある。

第2面の遺構(第12図下) XIV層の地山上面を遺構確認の第2面として精査した結果、1～3グリッドで溝3条、土坑1基、ピット2基を検出した。1号溝は1グリッドに位置する。遺構確認面では幅2m弱の大型の溝と思われたが、掘り下げた結果、複数の細い溝が重なり合ったものと考えられる。埋土は、地山ブロックを多量に含む単層で、上部で焼土ブロックが若干混入する。珠洲焼・土師質土器が出土した(第13図1・2)。2号溝は調査区北側壁際に検出した。平面形状は不明だが、上端が直線状なことから溝とした。断面観察の結果、2号



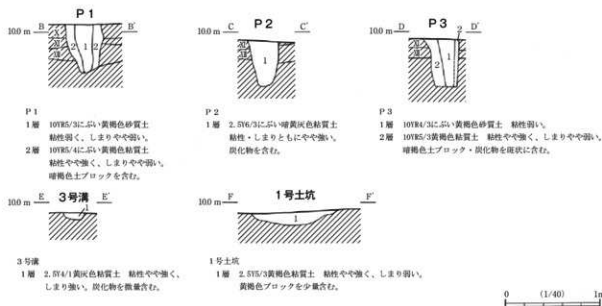
第11図 第6地点の平面図

溝が1号溝に先行する。また、西端は3号溝に壊されていることから、本遺構の方が時期は古い。3号溝は幅30cm以下の狭い直線状の溝で、南西側で1号土坑と重複する。ただし、土層による先後関係は把握できなかった。卑層の埋土からは須恵器の薄片が出土した。1号土坑は、方形の平面形で、断面形は深さ15cmの浅い皿状である。磁石1点が出土している。このほか1号溝の底面で小型のピットを2基検出したが、湧水が著しく詳細な記録は作成できなかった。



基本土層

- 1層 101R4/1灰褐色土 粘性弱く、しまり極めて強い。上層で砂利。下層で砂石を多く含む。固くしまる。表土。
 II層 101R5/4Cに灰黄褐色砂質土 粘性やや強く、しまり強い。山砂を多く、炭化物を少量含む。
 III層 2.5Y2/2暗灰黄色土 粘性やや弱く、しまり極めて強い。
 IIIb層 2.5Y2/2暗灰黄色土 粘性やや強く、しまり極めて強い。細砂を多く含む鉄分がシミ状となる。この層以下からは現代のごみなどは出土しない。
 IIIb層 2.5Y2/3黄褐色粘質土 粘性・しまりともにやや強い。砂粒を少量含む。
 IV層 2.5Y2/3黄褐色砂質土 粘性やや強く、しまり強い。粗砂を多く含む小礫を少量含む。下部に黄灰色砂シルトブロックを含む。
 V層 2.5Y2/3黄褐色粘質土 粘性弱く、しまりやや強い。粗砂を多く含む暗灰色土ブロックを少量含む。上部で土師質土器が出土。
 VI層 2.5Y2/3黄褐色シルト 粘性やや強く、しまり強い。炭化物を少量含む。
 VII層 2.5Y2/3黄褐色砂質土 粘性・しまりともに弱い。
 VIIb層 2.5Y2/3黄褐色砂質土 粘性弱く、しまり強い。
 IX層 2.5Y2/3黄褐色粘質土 粘性・しまりともに強い。炭化物を多量。堆土ブロック及び砂粒を少量含む。調査区西部部分で面的に広がる。
 X層 2.5Y4/1黄灰色砂質土 遺構埋没部下面。粘性やや強く、しまり強い。砂粒を含む。
 X1層 2.5Y4/2暗灰色砂質土 粘性やや強く、しまり強い。炭化物を少量。粗砂を多量含む。
 X2層 2.5Y4/3黄褐色粘質土 粘性・しまりともに強い。炭化物を多く含む。部分的に薄く堆積する。
 X3層 101R4/1黄褐色粘質土 粘性強く、しまり強い。黄褐色土ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。中世の遺物を包含する。
 X4層 2.5Y6/3Cに灰黄色シルト 粘性やや強く、しまり強い。堆土。
 1号溝 2.5Y4/1黄褐色粘質土 粘性強く、しまり強い。黄褐色土ブロックを多く、炭化物を少量含む。上部で堆土ブロックを含む。
 2号溝 2.5Y4/2暗灰色粘質土 粘性強く、しまり強い。黄褐色土ブロックを少量。炭化物を微量含む。中世の遺物が出土する。
 3号溝 2.5Y4/1黄褐色粘質土 粘性やや強く、しまり強い。炭化物を微量含む。



第12図 第6地点の基本土層と遺構断面図

3 遺 物

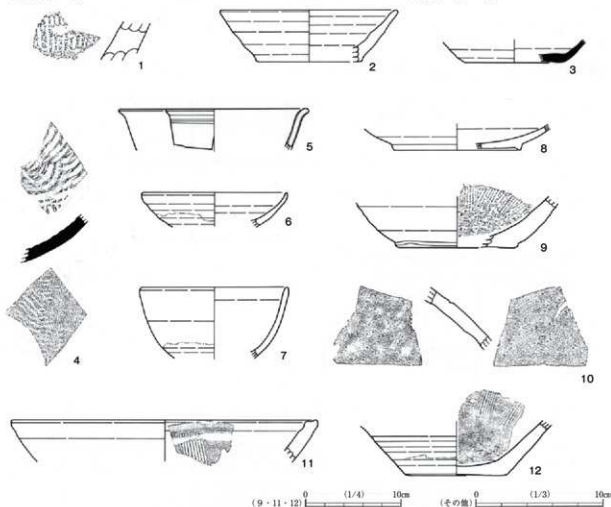
出土遺物には古代から近代にかけての陶磁器があり、その量は浅箱0.5箱分である。そのほかに、石製品（砥石）や金属製品（和釘）もわずかに出土した。本稿では、時期が分かるものを中心に抽出し、図化した。

1号溝（第13図1・2） 1は珠洲の片口鉢である。内面には卸目が認められる。胎土は砂質またはシルト質が強く、針状の海綿骨片が含まれている。焼成によりやや発泡した仕上がりで、ざらついた質感である。2は土師質土器の皿である。ロクロ成形で、口縁部に向かって直線的に立ち上がる。

遺構外出土（第13図3～12） 3・4は佐渡小泊産の須恵器である。3は無台杯で、底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。4は横瓶で、外面にカキメが施される。5は青磁の厚軸端反碗である。上田分類（上田1982）のD・Ⅱ類にあたり、東北日本海沿岸地域では1430年以降に流通が認められる（水澤2004）。6は瀬戸美濃の緑釉小皿で、古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期（14世紀末～1430年代）とみられる（藤澤2008）。7・8は瀬戸美濃の大甕製品（第1段階：1480～1530年頃）で、7は丸碗、8は皿である（愛知県史編さん委員会2007）。9・10は珠洲で、9は片口鉢、10は壺（T種）である。11は越前の播鉢である。口縁直下に沈線が巡り、播目は沈線を越えて引かれている。時期は1550～1600年（V3期）と考えられる（木村2016）。12は産地不明の陶器の播鉢で、外面に鉄釉が施されるが、底部は無釉である。時期は19世紀後半以降とみられる。

1号溝（1・2）

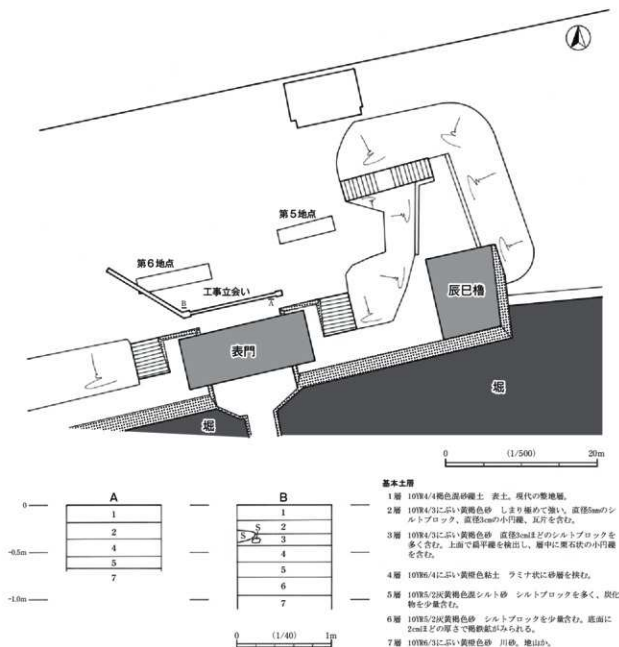
遺構外（3～12）



第13図 第6地点出土の土器・陶磁器

4 隣接地 工事立会いの成果

第Ⅱ章1で述べたとおり、新発田城址公園表門内 排水対策工事による排水清設置工事の立会い調査を実施した。工事による掘削は幅1mであったため、本調査は実施せずに工事の掘削時に観察と記録作成を行った。掘削位置は表門の内側に近接する場所で、表門の梁と平行したのちに北西に斜行する。この斜行部分で第6地点を横断する。掘削深度は70～110cmほどで、概ね第6地点と同様の状況で、整地層が広がると判断できる。3層(第6地点のⅢ層)からは、厚さ25cm、大きき70cmほどの礫が、平坦面を上に向け3つ並んで出土した。その下部からは拳大の礫が敷かれたような状態で出土した。この箇所は、「新発田御城中御門柄全図」(新発田古地図等刊行会1977)に描かれた敷石状施設の場所にあたり、これと関連性がうかがえる。



第14図 表門内排水対策工事の立会い調査範囲と土層模式図

第Ⅵ章 ま と め

新発田城跡は、加治川旧扇状地の扇央部に位置し、南西に新発田川、北東には中田川などの小河川が流れ、扇状地の中でも小高い場所に立地している。新発田城は、本丸、二ノ丸、三ノ丸からなり、今回報告した調査区（第4～6地点）は本丸に位置する。本丸は堀や土塁（総石垣・腰巻石垣部分を含む）に囲まれ、その内側には本丸御殿を構成する殿舎が建てられており、書院や広間は政治や儀式の場、居間や休息は藩主らの日常生活の場となっていた。本丸御殿は明治初年に取り壊されたが、その様子は明治初年に撮影された写真⁽²¹⁾や絵図からうかがうことができ、本丸御殿の建物配置を記した絵図として『新発田御城中御間柄全国』（新発田古地図等刊行会1977）がある。この絵図を参考にすると、第4地点は長局（御殿女中の住居）と呼ばれる長屋の西側に、第5地点は物頭番所・下番所に、第6地点は藩主御殿玄関前の広場にあたる。最後に、各地点の調査結果を振り返り、まとめたい。

第4地点では、地表下50～75cmの深さで整地層を捉えたが、建物跡や土坑は検出されず、石垣背面盛土の堆積を確認したのみである。背面盛土には遺物が含まれていなかったことから、盛土の構築時期を明らかにすることはできなかった。なお、出土層位が不明ながら中世の陶磁器が出土したことから、周辺での中世の遺構の存在をうかがわせた。一部、整地層よりさらに60cmほど掘り下げを行ったが、遺物は出土せず、砂とシルト質土が堆積していたのみであった。

第5地点では、調査深度が70cmで、旧陸軍時代の整地層までしか掘削しなかったため、近世以前の遺構を検出することはできなかった。ただし、それより下の堆積状況を把握するために、一部掘り下げたところ、整地層であるⅢ層の下に溝や土坑と考えられる遺構が存在することが分かった。遺物が出土しなかったことから、遺構の時期は不明だが、遺構の検出レベルが標高9.9mで、第6地点の中世の遺構検出レベルと極めて近いことを考えると、遺構の時期は中世の可能性が考えられる。

第6地点では、遺構確認面が2面あり、地表下80cmの深さで第1面を、地表下110cmの深さで第2面（中世）を確認した。中世の遺構検出レベルは標高10.0m前後である。これまでの新発田城跡の調査では、特に二ノ丸の北側で中世の遺構が多数検出されているが（新発田市教育委員会1997・2001）、第5・6地点の結果及び工事立会の内容を踏まえると、本丸内においても近世の整地層が存在した可能性が高く、さらにその下に中世の遺構が存在していることが明らかとなった。

今回の調査では、いずれの地点も調査範囲が狭小であること、また掘削深度も限られていたことから、検出した遺構は非常に少なく、また古代から近世の遺物が出土したもの、遺跡の性格を考察するまでには至らなかった。なお、新発田城跡は近代以降に旧陸軍省の新発田営所の影響下にあったことから、その後の土地利用について、比較的情報が残っている。本丸をみると、『旧新発田城絵図』（明治7年作成、新発田市歴史図書館所蔵）には、新発田営所に関わる病室が描かれている。また、昭和20年の終戦時には被服庫、弾薬庫及びそれに伴う防爆塹の土塁が存在していた（井上1994）。

本丸は近代以降の開発による擾乱が著しく、遺構の遺存状況は不良な地点も多いが、今回の調査結果により、中世の遺構が後世の影響を大きく受けることなく、埋没している部分もあることが判明した。

註

1) 明治初年に撮影されたとみられる、本丸御殿玄関、本丸内藩主住居及び折掛櫓の古写真が知られている(新発田古地図等刊行会1981)

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 産業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県
- 阿部洋輔 1980「室町期の展開」『新発田市史』上巻 新発田市
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 井上正一 1994「奉軍進駐と新発田(二)・第二の黒船「ジープ」」『新発田郷土誌』第23号 新発田郷土研究会
- 大橋康二 1989「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 小村 式 1980a「重家と景勝の争覇」『新発田市史』上巻 新発田市
- 小村 式 1980b「新発田藩の成立」『新発田市史』上巻 新発田市
- 小村 式 1980c「藩体制の整備」『新発田市史』上巻 新発田市
- 金子 智 1999「江戸道路出土資料に見る近世海風瓦の造様相」『古代』第106号 早稲田大学考古学会
- 木村孝一郎 2016「第1章 第3節 本報告での時間軸と用語」『越前焼総合調査事業報告書』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 国土地理院 1993「1:25,000 土地条件図 新発田」国土地理院
- 新発田市教育委員会 1997「新発田市埋蔵文化財調査報告第17 新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ(第7～10地点)」
- 新発田市教育委員会 2001「新発田市埋蔵文化財調査報告第24 新発田城跡発掘調査報告書Ⅲ(第11・12地点)」
- 新発田市教育委員会 2008「新発田市埋蔵文化財調査報告第38 新発田城跡発掘調査報告書Ⅴ(第19地点)」
- 新発田市教育委員会 2015「新発田市埋蔵文化財調査報告第54 新発田城跡発掘調査報告書Ⅹ(第26地点)」
- 新発田市教育委員会 2016「新発田市埋蔵文化財調査報告第55 新発田城跡発掘調査報告書Ⅺ(第13～15地点)」
- 新発田市古地図等刊行会 1977「新発田御城中御間柄全図」
- 新発田市古地図等刊行会 1981「写真集 城下町新発田」
- 新発田市立図書館 1983「新発田市立図書館 郷土資料目録 一集・二集合本(増補2刷)」
- 高橋礼弥 1979「新発田」『中部の市街古図』鹿島出版会
- 藤澤良祐 2008「中世瀬戸窯の研究」高志書院
- 水澤幸一 2004「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』第24号 日本貿易陶磁研究会
- 森田克行 1984「機内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城』高槻市教育委員会
- 渡邊美穂子 2016「第2章 第4節 新発田城跡の瓦」『新発田市埋蔵文化財調査報告第55 新発田城跡発掘調査報告書Ⅺ(第13～15地点)』新発田市教育委員会

表1 遺物観察表

掲載番号	地区	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度(%)	形状・装束	色調	土段・表面 下段：内面	土段：粘土色調 下段：混入物	備考 (時代、使用経路等)	確認	写真 図説
						口径	高さ	口縁 底径								
1	第4地点	4	-	青磁	鉢蓋(蓮弁文)	11.0	(2.2)	-	4	-	ロクロ成形、直線縁(2.507/1) 明オリーブ灰(2.507/1)	灰白(5/8/1)	15世紀後半～16世紀前半	4	-	-
2	第4地点	7	-	青花	陶 -	(4.0)	5.8	-	13	ロクロ成形、受付(花文) (内)線刻(高台内)： 龍図様内に施	明青灰(108/2/1) 明青灰(108/2/1)	灰白(5/8/1)	16世紀末～17世紀前半	4	4	-
3	第4地点	4	-	青花	皿 -	(1.1)	5.7	-	7	ロクロ成形、受付 明青灰(108/2/1) 明青灰(108/2/1)	明青灰(108/2/1) 明青灰(108/2/1)	灰白(5/8/1)	16世紀後半(砂付着)	4	4	-
4	第4地点	8	-	青花	皿 -	(2.4)	3.0	-	2	ロクロ成形、磨瑠璃 受付(見込み)：花鳥、 面(芭蕉文)	明青灰(108/2/1) 明青灰(108/2/1)	灰白(5/8/1)	15世紀後半～16世紀中葉	4	4	-
5	第4地点	-	緑土	瀬戸系遺(大甕)	燗灰皿	11.0	(2.3)	-	11	ロクロ成形、灰釉	浅黄(5/7/4) 浅黄(5/7/3)	にぶい黄緑(10/17/2) 灰-黒	大甕第1段階(1480～1530年代) (口縁)欠け、スス付着	4	4	-
6	第4地点	-	緑土	瀬戸系遺(大甕)	燗灰皿	(2.2)	5.0	-	12	ロクロ成形、灰釉 (流外)付け高台	灰オリーブ(7.5/6/2) 灰オリーブ(7.5/6/2)	灰白(2.5/8/1)	大甕第1段階(1480～1530年代) (流外)輪リ付着	4	4	-
7	第4地点	4	-	肥前陶器	皿	21.0	(3.3)	-	4	ロクロ成形、灰釉 (内)鉄絵	灰白(5/7/2) 灰オリーブ(5/6/2)	灰白(2.5/7/1)	17世紀前半	4	4	-
8	第4地点	-	緑土	肥前陶器	皿	13.1	3.4	4.4	14	ロクロ成形(口) (流外)磨瑠璃出し(花) 龍図、粘土目録み	灰黄緑(107/6/2) 灰黄緑(107/6/2)	にぶい黄緑(5/16/4)	大甕第1期(1580～1600年代)	4	4	-
9	第4地点	1	-	陶器(流地不明)	皿	20.4	3.8	10.3	12	ロクロ成形、化粧土 (流外)磨瑠璃出し(高台) (内)鉄絵(草文)	浅黄(5/7/3) 灰白(5/7/2)	灰(5/5/1)	内面に重ね焼き 痕(焼白) 19世紀後半以降	4	4	-
10	第4地点	6	-	陶器(流地不明)	鉢鉢	35.0	(7.5)	-	2	ロクロ成形、磨瑠璃 (内)磨瑠璃12条以上 一単位	暗赤黒(5/13/3) 暗赤黒(5/13/3)	黄緑(2.5/4/1)	19世紀後半以降	4	4	-
11	第4地点	4	-	陶器(流地不明)	鉢鉢	32.0	16.7	14.0	-	ロクロ成形、磨瑠璃 (流外)磨瑠璃出し(高台) (内)磨瑠璃13条以上 一単位	暗赤黒(5/13/3) にぶい赤黒(5/18/3)	にぶい黄緑(5/16/4) 灰-黒	内面に重ね焼き 痕 19世紀後半以降	4	-	-
1	第3地点	4	-	肥前系	横瓶	(3.4)	-	-	-	磨瑠璃成形 (外)カキメ	灰白(7.5/16/2) 灰黄緑(10/16/2)	灰(5/6/1) 石-長-黒	在地産	10	6	-
2	第3地点	-	土師器	小甕	-	(1.6)	6.8	-	7	ロクロ成形 (流外)磨瑠璃切	にぶい黄緑(2.5/16/4) にぶい黄緑(2.5/16/4)	にぶい黄緑(2.5/16/4) 石-長-黒	一次焼成を受け 酸化	10	-	-
3	第3地点	-	土師器	長甕	-	(3.5)	-	-	-	灰黄緑(107/6/2) (外)カキメ	灰黄緑(107/6/2) 灰黄緑(107/6/2)	灰黄緑(107/6/2) 石-長-黒	(内)灰白付着	10	-	-
1	第6地点	1号	-	珠洲	片口鉢	(3.0)	-	-	-	ロクロ成形 (内)磨瑠璃	灰(5/14/1) 灰(5/16/1)	灰(5/16/1) 磨瑠璃	13	6	-	-
2	第6地点	1号	-	土師系土器	皿	13.8	4.1	9.0	-	ロクロ成形	灰黄緑(7.5/16/2) にぶい黄緑(7.5/16/2)	にぶい黄緑(7.5/16/2) 石-長-黒	13	6	-	-
3	第6地点	-	肥前系	無台杯	-	(1.0)	7.8	-	5	ロクロサダ(左) (流外)磨瑠璃へラ切り	灰(5/6/1) 灰(5/6/1)	灰(5/6/1) 白	佐渡小甕産	13	6	-
4	第6地点	-	肥前系	横瓶	-	(3.7)	-	-	-	磨瑠璃成形 (外)カキメ	黄灰(2.5/16/1) 灰(5/15/1)	灰黄(2.5/17/2) 石-長-黒	佐渡小甕産	13	6	-
5	第6地点	-	青磁	厚鉢	燗灰皿	14.6	(4.2)	-	3	ロクロ成形、青磁釉	オリーブ灰(5/6/1) オリーブ灰(5/6/1)	灰白(2.5/17/1)	1430年以降	13	6	-
6	第6地点	-	瀬戸系遺(大甕)	鉢鉢	鉢鉢	11.3	(2.7)	-	6	ロクロ成形、灰釉	オリーブ黄(5/16/4) オリーブ黄(5/16/4)	灰黄(2.5/17/2) 石-長-黒	古瀬戸産(磨瑠璃) ～1380(1380～1440年)	13	6	-
7	第6地点	-	瀬戸系遺(大甕)	鉢鉢	鉢鉢	11.4	(5.7)	-	1	ロクロ成形、灰釉	灰白(7.5/17/2) 浅黄(7.5/17/2)	灰白(2.5/18/2)	大甕第1段階(1480～1530年代)	13	6	-
8	第6地点	-	瀬戸系遺(大甕)	鉢鉢	鉢鉢	(2.1)	10.0	-	7	ロクロ成形、灰釉 (流外)磨瑠璃出し(高台)	浅黄(5/7/4) オリーブ黄(7.5/16/2)	灰白(5/16/1)	大甕第1段階(1480～1530年代) (流外)磨瑠璃	13	6	-
9	第6地点	-	珠洲	片口鉢	-	(5.4)	12.0	-	6	ロクロ成形 (内)磨瑠璃12条以上 一単位	灰(5/6/1) 灰(5/4/1)	灰(5/6/1) 石-長-黒	磨瑠璃・灰化粧 付着 (流外)磨瑠璃	13	6	-
10	第6地点	-	珠洲	意匠(横)	-	(5.0)	-	-	-	磨瑠璃成形 (外)磨瑠璃「X」	灰(5/4/1) 灰(5/4/1)	灰(5/5/1) 石-長-黒	13	6	-	-
11	第6地点	-	鉢鉢	鉢鉢	鉢鉢	32.0	(4.4)	-	4	ロクロ成形 (内)流線・磨瑠璃10条 一単位	灰黄緑(107/6/2) 黄灰(7.5/16/1)	灰白(7.5/16/2) 石-長-黒	V3期(1530～1600年)	13	6	-
12	第6地点	-	陶器(流地不明)	鉢鉢	鉢鉢	(5.8)	10.4	-	3	ロクロ成形、磨瑠璃 (内)磨瑠璃11条一単位	灰白(5/4/2) 灰白(5/4/2)	にぶい黄緑(7.5/16/2) 石-長-黒	19世紀前半以降 (内)磨瑠璃	13	6	-

計測値：()は現存値を示す。

混入物の略称：石＝石英、長＝長石、角＝角閃石、雲＝雲母、霞＝霞石、白＝白色粘土、赤＝赤色粘土、黒＝黒色粘土、流線＝井状の流線付、磨瑠璃＝磨瑠璃。

瓦 (1)

計測値: []は推定値, ()は残存値を示す。

瓦葺番号	地区	グリッド	方位	種類	図種	計測値 (cm)	瓦当文様 (分類)・調整	色調	胎土	備考	神国	写真図版
12	第4地区	1	—	黒瓦	軒丸瓦	瓦当径18.1/瓦当厚1.5/文様区径11.3/周縁厚0.9 丸部:全長11.2/胴部長12.2/胴部厚15.9/胴部高7.4/胴部厚2.1/玉縁長1.5/玉縁高1.5	瓦当文様:連珠三巴文(60度)横① 瓦当部:丸部接合方法:接合用粘土式丸部凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、釘穴1ヵ所、刷目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面側縁	灰 (19/15/1)	灰白 (5/17/1) 硬質		5	4
13	第4地区	6	—	黒瓦	軒丸瓦	瓦当径14.6/瓦当厚2.7/文様区径10.2/周縁厚0.7	瓦当文様:連珠三巴文(60度)横② 接合部:カキヤブリ葺	灰 (19/6/1)	灰白 (5/18/1) やや軟質		5	4
14	第4地区	1	—	黒瓦	軒丸瓦	瓦当径12.0/瓦当厚2.6/文様区径8.6/周縁厚0.7	瓦当文様:連珠三巴文(100度) 瓦当部:ケラコ(隠れ砂板)	灰 (7.19/6/1)	灰白 (5/17/1) 硬質		5	4
15	第4地区	6	—	赤瓦	軒丸瓦	瓦当径14.8/瓦当厚2.2/文様区径10.2/周縁厚0.9	瓦当文様:三巴文	埴土灰 (7.19/4/1) 無施	にぶい地 (7.5/17/4) 硬質		5	4
16	第4地区	1	—	黒瓦	軒丸瓦	全長33.6/胴部長26.2/胴部厚12.0/胴部高8.3/胴部厚2.3/玉縁長4.3/玉縁高(8.3)/玉縁高5.1	瓦当接合部:カキヤブリ葺 凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、釘穴1ヵ所 凹面/コビキル、布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端、玉縁部凸面上端	灰 (9/6/1)	灰白 (5/18/1) 硬質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	5	4
17	第4地区	6	—	黒瓦	軒丸瓦	瓦当径12.0/瓦当高4.8/瓦当厚2.2/文様区径11.0/文様区径2.8/周縁厚0.5	瓦当文様:60°の字交文(60度)① 瓦当部:ケラコ(隠れ砂板) 瓦当部:平縁接合方法:サマツヤギ接合接合部:カキヤブリ葺	灰 (15/1/1)	灰白 (2.5/17/1) 硬質		5	4
18	第4地区	1	—	赤瓦	軒丸瓦	瓦当径11.0/瓦当高13.6/瓦当厚2.1/文様区径11.0/文様区径2.8/周縁厚0.6	瓦当文様:菊文 瓦当部:平縁接合方法:凸面接合接合部:カキヤブリ葺	にぶい地 (5/19/6/4) 無施	にぶい地 (7.5/17/2) 硬質		5	4
19	第4地区	2	—	黒瓦	丸瓦	全長12.6/胴部長22.6/胴部厚12.7/胴部高6.1/胴部厚1.8/玉縁長1.5/玉縁高1.5	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、釘穴1ヵ所 凹面/布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端・側縁、胴部凸面側縁	灰 (9/6/1)	灰白 (2.5/17/1) 硬質		5	5
20	第4地区	2	—	黒瓦	丸瓦	全長12.6/胴部長22.6/胴部厚12.7/胴部高6.1/胴部厚1.8/玉縁長1.5/玉縁高1.5	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、釘穴1ヵ所 凹面/布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端・側縁、胴部凸面側縁	灰 (9/6/1)	灰白 (2.5/17/1) 硬質		5	5
21	第4地区	1	—	黒瓦	丸瓦	全長12.2/胴部長17.7/胴部厚15.2/胴部高7.6/胴部厚2.2/玉縁長4.5/玉縁高14.6/玉縁高4.9	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、釘穴1ヵ所 凹面/布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端・側縁、胴部凸面側縁	灰 (7.19/6/1)	灰白 (2.5/18/1) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	—
22	第4地区	2	—	黒瓦	丸瓦	全長12.0/胴部長16.8/胴部厚12.7/胴部高6.1/胴部厚1.8/玉縁長1.5/玉縁高1.5	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、釘穴1ヵ所 凹面/コビキル、布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端・側縁、胴部凸面側縁	灰 (14/4/1)	灰黄 (2.5/17/2) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	—
23	第4地区	1	—	黒瓦	丸瓦	全長11.6/胴部長12.0/胴部厚13.4/胴部高7.6/胴部厚2.5/玉縁長13.7/玉縁高(8.5)/玉縁高5.8	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、刷目 凹面/布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端・側縁	灰 (15/1/1)	灰黄 (2.5/17/2) 硬質		6	5
24	第4地区	2	—	黒瓦	丸瓦	全長11.5/胴部長11.5/胴部厚11.2/胴部高7.7/玉縁長(8.7)/玉縁高3.5	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、刷目 凹面/コビキル、布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端・側縁、胴部凸面側縁	灰 (7.19/5/1)	灰黄 (2.5/17/2) 硬質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	5
25	第4地区	2	—	黒瓦	丸瓦	全長10.0/胴部長15.8/胴部厚14.2/胴部高7.1/胴部厚2.6/玉縁長13.7/玉縁高(13.6)/玉縁高4.2	凸面/ケズリ後縦方向ミガキ、刷目 凹面/布目(朝顔・正産)、タタキ面取り・胴部凸面上端、玉縁部凸面上端	灰白 (2.19/8/1)	灰白 (2.5/18/1) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	5

瓦 (2)

掲載 番号	地区	グ リ ッド	層位	種類	図種	計測値(cm)	瓦当文様(分類)・調整	色調	胎土	備考	採掘	写真 図録
26	第4 地点	2	-	黒瓦	平瓦	全長(12.9)/広端幅/狭端 幅(13.9)/弧深1.7/厚2.2	凸面:ナヅ 凹面:ミガキ 面取り:凸面下端・側縁	灰 (5/5/1)	灰白 (5/5/2)		6	-
27	第4 地点	2	-	黒瓦	平瓦	全長(17.8)/広端幅 (14.2)/狭端幅/弧深5.9/ 厚2.1	凸面:ナヅ 凹面:ミガキ 側面:ミガキ・無調整(上端) 面取り:凸面側縁、凹面側縁	青灰 (5/5/1)	灰白 (5/5/1)		6	-
28	第4 地点	3	-	黒瓦	平瓦	全長(22.4)/広端幅/狭端 幅(7.7)/弧深2.4/厚2.2	凸面:ナヅ 凹面:ミガキ 面取り:凸面下端・側縁、凹面下端・側 縁	青灰 (2.5/6/1)	灰白 (2.5/8/2)		6	5
29	第4 地点	1	-	黒瓦	平瓦	全長(24.3)/広端幅(9.6)/ 狭端幅/弧深3.6/厚2.2	凸面:無調整 凹面:ミガキ 側面:ミガキ・無調整(上端) 面取り:凹面側縁	灰 (5/5/1)	灰白 (2.5/8/2)		6	5
30	第4 地点	2	-	黒瓦	鬼瓦	全長(25.1)/幅(29.8)/厚 3.1	文様:糸節巻 表面:ケズリ後ミガキ 裏面:ケズリ 側面:ミガキ・ナヅ(上端) 面取り:表面側縁、裏面側縁	灰 (5/4/1)	灰白 (2.5/8/1)		7	5
31	第4 地点	1	-	黒瓦	鯉斗瓦	全長(12.4)/幅(11.4)/厚 2.1	凸面:無調整 凹面:ミガキ・平行沈線 面取り:凹面側縁	灰 (5/5/1)	灰白 (2.5/7/1)		7	5
32	第4 地点	1	-	黒瓦	南葺瓦	全長(28.0)/幅(13.1)/厚 2.4	表面:ミガキ・漆喰目立割線 裏面:ミガキ 側面:ミガキ・釘固定痕(8箇所) 面取り:表面下端・側縁	灰白 (5/8/2)	灰白 (5/8/2)		7	5



作業風景（南から）



作業風景（北から）



作業風景（東から）



作業風景（西から）



基本土層（1グリッド）（南から）



石垣背面盛土断面（北西から）



石垣背面盛土断面（西から）



調査区全景（西から）



基本土層（4グリッド）（西から）



遺構検出状態（北から）



作業風景（南西から）



調査区全景（東から）



基本土層（1グリッド）（南から）



P1～3 検出状態（南から）



1～3号溝 完掘状態（西から）



作業風景（北西から）



4-2



4-3



4-4



4-4



4-5



4-6



4-7



4-8



4-9



4-11



4-12



4-12



4-12



4-14



4-12 (銅印)



4-13



4-15



4-16



4-16



4-17



4-18



4-17



4-18



4-19



4-19



4-23



4-23



4-24



4-24



4-25



4-25



4-28



4-28



4-29



4-29



4-30



4-30



4-32



4-31



4-23 刻印



4-25 刻印



5-1



5-1



6-1



6-2



6-2



6-3



6-4



6-4



6-5



6-6



6-7



6-7



6-8



6-8



6-9



6-10



6-11



6-12

報 告 書 抄 錄

[illegible]

新発田城跡 発掘調査報告書Ⅻ

第4・5・6地点

発行 令和3（2021）年8月31日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次281番地2
印刷 鳥津印刷株式会社

本書は、本文・図版ともに中性紙を使用しています。